

愛媛大学医学部 同窓会会報

2011 OCTOBER No.27

発行日/平成23年10月1日

編集発行人/高田 清式

発行/愛媛大学医学部同窓会
〒791-0295

愛媛県東温市志津川

TEL(089)960-5231

原印刷株式会社

TEL(089)974-8711

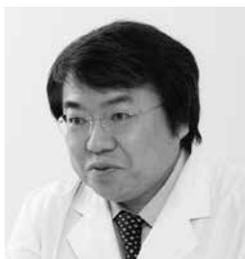


表紙写真紹介「地域医療支援センター」

CONTENTS

会長挨拶	2
卒業生からのメッセージ	3
新人教授からのメッセージ	4
第27回通常総会報告	7
愛媛大学医学部同窓会会則	8
愛媛大学医学部同窓会会則施行細則	8
愛媛大学医学部同窓会 申し合わせ事項	9
医学祭を終えて	9
スタンフォード医療研修に参加して	10
同窓会報告	11
支部紹介	12
医学部医学科人事異動	14
お知らせ	15

会長挨拶



高田 清式 (昭和56年卒・3期生)

3月11日の東日本大震災では同窓の皆様にも多くの影響があったこととお察しいたします。ご関係の方々でご不幸な思いをされました皆様には謹んで哀悼の意を申し上げます。また遠く離れた四国の地でも、薬剤の品薄や省エネなどをはじめ、少なからずの影響を皆様お感じだったことと思います。震災前の元気のある日本にいち早く戻ることを祈っております。その他、この最近では大相撲の八百長問題、竹島、北方四島などの日本国の領土主権問題、歌舞伎役者への暴行事件など多くの話題・事件もあり、さらに医療の分野でも、この震災に起因する福島原発による健康被害や地方の慢性的な医師不足の件など、やはり問題が山積された話題は毎年尽きません。さてわが愛媛大学医学部は昭和48年設立、創設38年が経ち、この3月に第33期生が学窓を巣立ち(医師国家試験の今年の合格率は89.3%と80大学では平均程度の数字で、2年、3年前の全国5位以内に比べ幾分芳しくない成績でした)、国内外の医療現場で会員の皆様が毎年積極的な活躍を行っておられます。益々のご活躍を期待しております。大学の近況としては、教育面では平成18年度から導入された「地域特別枠自己推薦(推薦B)」入学者が平成22年度から10名からさらに5名が増員(計15名定員)されました。従って、一般入試65名、推薦A(学校推薦)25名、推薦B15名、学士2年次編入5名の計110名(香川県地域枠の2名がさらに加わります)1学年あたりの定員になっております。このように学生の人数も増加し、より一層の医学教育の充実を図る必要性を感じているところで。また、本年8月に地域医療支援センター(3階建)が完成し、一昨年に開設された「地域医療学講座」、昨年開設された「地域救急医療学講座」「地域医療再生学講座」「地域生活習慣病・内分泌学講座」の各寄付講座の1つの拠点の場としての役割を担っております。ご報告として、このセンターの3階に待望の医学教育トレーニングセンターの設置も行い、後輩学生・研修医および若手医師、会員の生涯教育の場として目下設備の充実を図りつつあります。また、昨年度に完成いたしましたゼミナール室(多くの学内外の会議やセミナーを行う場)や新しい組織実習室がある総合教育棟も今やフル活用されつつあります。これらの設備の充実にあたり会員皆様から多額の寄付もいただき、大変感謝申し上げます。大口のご寄付をいただいた会員の皆様の名前を記したプレートを掲示するように目下作製しつつあります(目下作成中の同窓会ホームページにも掲載予定)。さらに話題として、同窓の先輩からの勧めもあり、以前から考えていた白衣授与式を本年4月28日に全5年生に(臨床実習開始前)厳かに挙行了しました。臨床実習を真摯に取り組む目的で多くの教務・病院関係の教授が出席して各学生個々のネームと医学部のマークが刺繍された白衣を1人1人に激励しつつ着用を手伝う儀式で、学生の中には感極まり眼を潤ませている姿も少なからず見られました(医学部や総合臨床研修センターのホームページをご参照ください)。なお、医学部の本館の改修も今も進行形ではありますが、徐々に各講座教室がきれいにリフォームされつつあります。また、学生環境の整備として、この1、2年で福利会館・体育館のリフォーム、武道場建設、テニスコート・グラウンドの夜間照明などが計画・具体化されつつあり、学生の生活・課外活動面でもさらに充実が図れるものと期待しております。なお、グラウンド南側に待望の学生および研修医の各々の宿舎も新しく建築予定です。今年度中に完成し、新年度から入居できる予定です。このように私どもが学生の頃の30年以上前には考えられなかった色々な環境整備・充実が進行されつつあり、今後母校の益々の発展を期待しております。以上が大まかな近況ですが、わが愛媛大学医学部同窓会としても、医学部の発展のためにより多く寄与できるように今後も頑張る所存ですので何卒宜しくお願い申し上げます。また、今回も遠方の会員の皆様に大学をよく知っていただくことを目的に、私ども附属病院総合臨床研修センターが毎年作製しております「専門研修案内」を、横山病院長とも相談し今年も会員の皆様に同封し配布することと致しました。大学病院の近況の理解に役立てば幸甚です(これを機に大学へ戻って来られる会員の方も大歓迎です)。

最後になりましたが、この激動の年も、会員皆様益々のご健勝をお祈り申し上げます。

卒業生からのメッセージ



岩田 猛 (昭和55年卒・2期生)

(独立行政法人国立病院機構愛媛病院 院長)

平成23年4月より愛媛病院の院長を拝命致しました。私の年代では“療養所”の方がなじみ深いかもしれませんが、平成16年に独立行政法人化され独立行政法人国立病院機構愛媛病院と長い名前になっています。国立病院機構は現在全国に144の病院があり、県内では四国がんセンターと当院の2つです。全国で約5万人の職員を擁する組織で、院長に就任すると東京本部で院長研修があります。国立病院機構の院長就任は愛媛大学卒業生としては初めてとのことで、同級生をはじめ愛媛大学関係の皆さまからお祝いの言葉を頂き感謝しております。

私は昭和55年に卒業後、当時の第二内科(国府達郎初代教授)に入局しました。日和田邦男先生(第2代教授)の指導のもとに大学院を昭和60年に修了し、昭和62年から2年間米国ニューオーリンズのDr. Frohlichの研究室に高血圧研究で留学致しました。学生時代からの願いが叶い貴重な体験が出来た2年間でした。帰国して愛媛大学に4年間勤務した後に市立八幡浜総合病院に異動しました。八幡浜での16年間は循環器内科医として色々な経験を積み、副院長になってからは救急問題や医師不足で苦勞しましたが、その全てが今は役立っています。西村一孝前院長や愛媛大学の檜垣実男教授のご助言もあり平成20年に愛媛病院に副院長として赴任し、西村先生の後任として院長に昇任出来ました。

医学部5年生の呼吸・循環器のポリクリ実習の1日を愛媛病院が担当しており、院長として後輩医学部生との話を楽しんでいきます。学生時代には医学部バドミントン部を同級生と創部して初代キャプテンになり、最初は医学部校舎のレング敷きのコンコースで練習していたことなどが懐かしい思い出です。卒業して31年になりますが、バドミントン部が医学部では部員が多いサークルに発展したことを喜んでいきます。

愛媛病院は創立から70年以上になりますが、長かった国立療養所時代を経て新しい時代を迎えています。現在の当院の使命のひとつは政策医療の神経難病、重症心身障害者、結核で愛媛県の基幹病院としての役割を果たすことで、もうひとつは地域の急性期病院として地域医療を担うことです。平成24年末には5階建ての新病棟が完成予定です。今後は隣接するということを利用して愛媛大学医学部附属病院とより深い協力関係を構築するとともに、同じ国立病院機構である四国がんセンターとも協力して愛媛の医療に貢献するつもりです。同窓の皆さまには今後ともご指導、ご鞭撻を宜しくお願い致します。最後に、愛媛の医療で愛媛大学同窓会員が中心的な役割を果たすこと、そして愛媛大学医学部同窓会がますます発展することを祈り申し上げます。



海藤 俊行 (昭和61年卒・8期生)

(鳥取大学医学部医学科 機能形態統御学講座 ゲノム形態学分野 教授)

愛媛大学医学部同窓会の皆様には、ご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび、平成22年8月1日付で、鳥取大学医学部医学科 機能形態統御学講座 ゲノム形態学分野の教授に就任いたしました。これまで愛媛大学同窓会の多くの先生方に変なお世話になりましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。所属の名称が長くて恐縮ですが、従来の解剖学講座に相当いたします。

先日、久しぶりに愛媛大学医学部の構内を歩く機会がありました。私が在学していた昭和60年頃に比べて、附属病院2号館・3号館や保健学科棟が建ち、在学当時はまだ低かった木々が高くうっそうと茂るようになり、大きく様変わりした印象を受けました。そして、この約25年の間に、「愛媛大学医学部は多くの医師・看護師・研究者を育成し、数え切れないほど多くの患者さんの健康を守り、生命を救ってきたのだな」と思いを馳せておりました。

私は愛媛大学医学部に入学し、旧解剖学第2講座の上原康生先生のもとで微細形態に関する研究を行いました。その当時、上原先生や教室におられた小室輝昌先生、藤原隆先生、出崎順三先生、大学院の先輩であった松田正司先生、中村桂一郎先生らには、今日に至るまで公私にわたり大変お世話になりました。また、同級の中城敏先生には、大学在学中から留学時、そして今日までいつも励ましをいただき心より感謝しております。

私は愛媛大学大学院を卒業後、熊本大学、米国留学などを経て、平成8年に鳥取大学医学部の解剖学講座に赴任いたしました。鳥取大学には愛媛大学出身者は少なかったのですが、医動物学講座に平井和光先生がおられて、私の赴任当初からいつも温かく接して下さいました。鳥取大学医学部のある鳥取県米子市は、周囲を日本海・中海・大山に囲まれた自然の豊かな街です。松山も瀬戸内海の高産物が豊富ですが、米子は冬には松葉ガニ、夏には岩牡蠣やマグロといった豊かな日本海の産物を味わうことができます。また近くには、小泉八雲と関わりの深い松江や、横山大観と日本庭園で知られる足立美術館、ゲゲの女房や水木しげるロードで有名になった境港などがあって文化・観光的にも楽しむことができます。

鳥取大学医学部は形態研究の基盤が確立しており、私の研究も細胞・組織の形態と分子発現が主要テーマです。皮膚などの機械受容器は大変美しい形態と繊細な感覚受容機能を有しており、その形態形成メカニズムについて分子レベルで解析しております。また教育面では、これまで肉眼解剖から顕微解剖について広く教えてきましたが、最近では聴覚障害者のための医療手話教育にも力を入れております。ご献体を使わせていただく解剖教育や福祉の面を持つ手話教育では、ともすると忘れがちな「医師(医学生)としての謙虚さや、患者を思いやる気持ち」をしっかりと教え、良医の育成に貢献したいと考えております。

私は、遠方の鳥取大学で研究・教育に励んでおりますが、同窓会などで思い出話に花が咲くと愛媛大学医学部で過ごした若かりし日のことが思い出され、元気が湧いてきます。これからも母校の愛媛大学医学部と愛媛大学医学部同窓会がますます発展するとともに、皆様方が元気で活躍されることを心より祈りいたします。

卒業生からのメッセージ



協坂 浩之 (平成7年卒・17期生)

(愛媛県立医療技術大学 保健科学部 基礎教育講座 教授)

平成23年4月より、愛媛県立医療技術大学保健科学部基礎教育講座教授として臨床外科学・臨床解剖学を担当する事になりました。愛媛大学在職中は同窓会をはじめとする多くの先生方に公私ともに大変お世話になりました。この場を借りてあらためて御礼申し上げます。

愛媛県立医療技術大学は看護学科と臨床検査学科の2学科より構成され、その歴史は昭和34年の愛媛県立高等看護学院の開設および昭和38年の愛媛県衛生検査技師養成所の開設に遡ります。その後、名称の変更などを受けながら昭和63年に両校が一つとなって愛媛県立医療技術短期大学が誕生し、砥部の地に現在の学舎が建設されました。医技短という愛称で親しまれておりました。

私が、平成16年に4年制大学へ移行して愛媛県立医療技術大学となり、現在は医技大という愛称で呼ばれております。学内には、佐田榮司教授(2期生)、鳥居順子講師(7期生)、草薙康城教授(9期生)など諸先輩方がおられるため非常に心強く、また様々なサポートをして頂き大変感謝しております。

私は平成7年に愛媛大学医学部を卒業後、愛媛大学耳鼻咽喉科頭頸部外科に入局し、1年間大学病院で研修させていただきました。平成8年より、市立宇和島病院で2年間勤務させていただいた後、平成10年より愛媛大学解剖学第一(現解剖学発生学)助手として松田正司教授のもとで解剖学教育や研究(HSV-1の顔面神経障害に関する研究)の指導を受けることが出来ました。この間も診療および手術を続けることが出来たので、学生に対する解剖学教育自体が自分自身の手術手技の向上に非常に役立ちました。学位取得後はオーストラリア、シドニー大学へ文部省在外研究員として留学させていただき、その間、HSV-1の増殖メカニズムをテーマとした基礎研究に没頭いたしました。平成15年に帰国した後は、愛媛大学耳鼻咽喉科頭頸部外科助手、助教、講師として頭頸部癌、頭頸部外科、甲状腺外科を専門として診療、手術および研究を行って来ました。また平成21年からは解剖学発生学准教授として、頭頸部外科臨床に加えて解剖学教育にも再び携わることが出来ました。この間、愛媛大学で約14年間在職しましたが、長年にわたりご指導頂きました愛媛大学名誉教授 柳原尚明先生、愛媛大学耳鼻咽喉科頭頸部外科教授 嶋清文先生、愛媛大学解剖学発生学教授 松田正司先生(2期生)、現名古屋市立大学耳鼻咽喉科頭頸部外科教授 村上信五先生(2期生)、現高知大学耳鼻咽喉科頭頸部外科教授 兵頭政光先生(5期生)、また愛媛大学で共に診療や教育、研究に携わってくださった様々な診療科の先生方、スタッフの方々にも心より感謝を申し上げたいと思います。

これまででは愛媛大学の中から愛媛大学を見つめて来たわけですが、今後は愛媛大学の外から違った形で愛媛大学医学部の発展に貢献していきたいと考えております。新しい職場に赴任したばかりで、まだまだ十分なことは出来ておりませんが、本学学部生への講義を行う傍ら、愛媛大学で講義や実習をさせて頂いたり、新しい研究の計画作成などにも着手したりと忙しくさせて頂いております。また臨床では、愛媛大学での診療や手術を引き続き行わせて頂いており、今まで以上に学内外の先生方と協力しながら愛媛県の頭頸部癌、頭頸部外科診療、また臨床解剖学教育の発展に貢献していければと考えております。愛媛大学医学部同窓会の皆様には今後とも、何卒ご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

新人教授からのメッセージ



北澤 荘平

(愛媛大学大学院医学系研究科 病態解析学 分子病理学 教授)

平成22年6月1日より、愛媛大学大学院医学系研究科分子病理学分野教授として着任いたしました。愛媛大学大学院医学系研究科分子病理学分野は、昭和48年4月、愛媛大学医学部開設当時、先発7講座の1つとして、初代教授福西亮先生が着任し、病理学第一講座として開講しました。化学発がん研究、病理診断を中心として、地域医療にも貢献して参りました。初代福西先生が平成3年に愛媛大学学長になり、当時助教授であった植田規史先生が2代目教授となり、研究、教育をバランスよく統括され、大学院大学化、国立大学法人化の波を乗り越え発展して参りました。植田規史先生の定年退官の後、神戸大学大学院医学研究科分子病理診断学分野の特命教授で

あった北澤荘平が、3代目の教授として着任いたしました。現在、ゲム病理学分野(旧第二病理)と病院病理部との協力で、研究、教育、病理診断業務を遂行しています。

私は、卒業直ちに神戸大学第2病理の大学院生となり、1年後に助手に採用されました。2年間国立神戸病院(現神戸医療センター)で一人病理医として、全ての病理解剖、迅速診断、病理解剖を行いました。病理解剖を年間90から100体経験させていただいたことは大変な財産となっております。また、術前術後のカンファレンスを通じて臨床の先生方より多くのことを学びました。その後、大学に復職し、2年間の米国留学(ワシントン大学病理学、セントルイス)、帰国直後の阪神淡路大震災、大学改組、病理学分野の改変の繰り返しなど激動の中をなんとか研究、診断の3本柱を保ってまいりました。震災復旧の中、夫婦で(家内も病理医で現在神戸大学の特命准教授)安全な実験室の在り方、感染対策を徹底した剖検室の設計から運用まで行えたことは貴重な体験でした。一方、大学改組、病理分野の再編、再々編を繰り返す中、神戸大学病理学教室は、料木の完成図の見えない不安な状態にありました。最終的に、私は兵庫県との連携講座の特命教授となりましたが、しっかりとした学問基盤を元に教育、研究、診断を行うため、愛媛大学に移ることを希望いたしました。

私はこれまでの人生で、留学期間を除いて阪神間を離れたことは有りませんでした。愛媛大学に着任して感じましたことは、学生の生活面にまで指導の行き届いた教育システムのすばらしさ、同時に教育熱心な先生が多いことです。残念ながら、どこの大学でも不登校となり、長期の休学を繰り返しながら卒業できなかつたり、卒業しても医師国家試験に合格せず、ずるずると人生を過ごしてしまったりする例があります。愛媛大学では、教員がきめ細やかな学生指導を行っており、また、学生も講義実習のみならず課外活動にも熱心に取り組んでおり、そのようなドロップアウトする学生が極めて少なく、大学全体として将来に対する大きな活力を感じます。私もこの大学の教員の1人として、愛媛大学の発展に役立てるよう頑張っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



今村 健志

(愛媛大学大学院医学系研究科 統合生体情報学 分子病態医学 教授)

平成22年(2011年)10月1日付けをもちまして、愛媛大学大学院医学系研究科分子病態医学分野教授を拝命いたしました。愛媛大学同窓会の皆様にご場をお借りして、ご挨拶申し上げます。

私は、昭和36年(1961年)に鹿児島市で生まれ、鹿児島ラ・サール高校を卒業後に鹿児島大学医学部に入学し、昭和62年(1987年)3月に同大学を卒業しました。大学卒業後は、鹿児島大学医学部整形外科学教室(酒匂崇教授)に入局し、整形外科の臨床研修、大学院を経て、平成6年(1994年)に整形外科専門医を取得しました。その後、宮園浩平先生(現東京大学医学部長)

にお会いし、スウェーデン王国ウプサラ大学ルードヴィヒ癌研究所の宮園先生の研究室に2年半留学し、本格的に基礎研究を開始しました。平成8年(1996年)9月から当時、東京都豊島区大塚にあった財団法人癌研究会癌研究所生化学部(宮園浩平部長)で研究員として基礎研究を続け、平成22年(2011年)10月に愛媛大学に転任するまで約14年間癌研究所にお世話になりました。

財団法人癌研究会は、明治41年(1908年)に設立された日本最初のがん専門機関です。平成20年(2008年)で設立100周年を迎え、この平成23年(2011年)4月1日より公益財団法人がん研究会として新たな船出を迎えました。設立以来、がん研究会は基礎(研究所)と臨床(病院)とが一体となった活動により、日本のがん研究と診療をリードしてきました。特に研究所の研究活動はめざましいものがあり、米国の科学専門誌「サイエンス」がおこなった"日本の科学"と題する特集の中で、癌研究所は、がんの分野のみならず生物科学の分野で世界的にトップのレベルにあるとの評価を得ることがあります。特に、生化学部は、現在に至るまで常に日本の基礎研究のリーダー的役割を果たしてきました。昭和51年(1976年)に初代小野哲生部長の後を引き継いだ第2代村松正実部長(のちに東京大学医学部生化学教授)は、いち早く遺伝子組み換えの技術を導入し、リボゾームRNAの研究などすばらしい研究成果を残されました。第3代谷口維紹部長(現東京大学医学部免疫学教授)は、当時夢の薬と考えられていたインターフェロン β の遺伝子を世界に先駆けてクローニング(単離)され、その後インターロイキン2のクローニングにも関わった日本を代表する免疫学者です。第4代藤井義明部長(のちに東北大学教授)は薬物代謝の中心的存在である酵素チトクロームp-450等のクローニングと機能解析で活躍されました。第5代中村祐輔部長(現東京大学医科学研究所教授)は、現在の日本のゲノムサイエンスの中心人物で、癌研在籍中に家族性大腸腺腫症の原因遺伝子APCを同定されました。前部長の第6代宮園浩平部長(現東京大学医学部分子病理学教授)は、TGF- β 研究では世界の第一人者であられ、癌研在籍中にシグナル伝達系の解析やSmadの発見、さらにアポトーシスに重要なASK1のクローニングと機能解析に成功されました。

私は平成15年(2004年)から6年間第7代生化学部部長としてラボを主宰しましたが、この期間は癌研究所にとっても私にとっても激動の時期でした。癌研は平成17年(2006年)に住み慣れた大塚(東京都豊島区)の地を離れ、新たに有明(東京都江東区臨海副都心)の地の新しい病院と研究所に移転しました。移転は大事業でしたが、私はこの移転を転機に研究方針の転換を図りました。新しい施設で、先進的テクノロジーとしてインビボバイオイメージング技術を取り入れた先端研究を開始し、予想以上に発展させることができました。インビボバイオイメージングは近年ライフサイエンス分野で注目されている新技術ですが、中でも、発光物質、蛍光タンパク質や蛍光有機小分子を用いたインビボ光イメージングの進歩は著しく、我々はこの技術を利用して、生きている動物の中で起こっている現象を細胞・分子レベルでリアルタイムにイメージングを試み、多くの成果を上げることができました。また、新たに機器開発にも取り組み、平成22年(2010年)から科学技術振興機構(JST)の戦略的創造研究推進事業(CREST)の研究代表者として、研究課題「新規超短パルスレーザーを駆使したin vivo光イメージング・光操作のがん研究・がん医療への応用」に取り組み、先端光源を駆使した光科学・光技術の融合展開を開始しました。このような状況の中、それまで一貫しておこなって来た生化学と分子生物学的手法に加え、光技術開発を加速させ、学際的研究を広げるべく、新たな研究環境を探していたところ、縁あって、この度愛媛大学にお世話になることになりました。

私の主宰する分子病態医学分野は、平成22年(2010年)10月1日に愛媛大学大学院医学系研究科に新設された教室です。正田温彦准教授、佐々木真理助教、本蔵直樹研究員、友松沙耶子秘書のスタッフを中心に、大学院生と研究補助員も徐々に揃い、平成23年4月に本格的に始動しました。この立ち上げに際し、多くの大学関係者の方々に温かいご支援を頂き、皆様にとっても感謝しております。改めて御礼申し上げます。愛媛大学では、私のこれまでのTGF- β シグナル伝達とがん、骨代謝研究を発展させるのみならず、光技術を駆使した革新的なイメージング技術開発を発展させ、基礎研究のブレークスルーを目指したいと思っております。さらに、このイメージング研究を橋渡し研究に発展させ、学内外の臨床の先生とタイアップし、光内視鏡など新規医療機器の開発もおこなう予定です。立ち上げのメンバーの数は少ないですが、皆やる気のある若者ですので、皆様のご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い致します。

最後になりましたが、愛媛大学同窓会会員の皆様のご今後のご発展を祈念し、私の就任のご挨拶とさせていただきます。



泉谷 裕則

(愛媛大学大学院医学系研究科 外科学 心臓血管呼吸器・再生外科学 教授)

平成23年6月1日付で愛媛大学大学院医学系研究科心臓血管呼吸器・再生外科学教授に就任しました。平成21年10月16日に同准教授に就任して以来、河内寛治前教授をはじめ愛媛大学の諸先生方に多大なご指導を頂きました。

「一期一会」の毎日、気がつけば20余年

私の若い頃を知る先生方の中には、私が教授職に就くことに驚かれている方も多いと思います。研修医の頃は、「心臓外科は嫌いやろ」とか、大学院生の頃は、「大学の仕事が一番似合わん」と言われたこともありましたが、世の中は何が起こるか分からないものです。

医師となって20余年、気がつけば心臓外科医としての日々を過ごしていますが、いつも目の前のことに精一杯で遠くを見渡せず、明日のことはともかく来年の自分の姿もわからない状態が続いてきました。偶然でも必然でもなく時が流れ、人と巡り合い、動いては止まりの繰り返し。不安でなかったと言えば嘘になりますが、ただどちらかというワクワクした気分の方が大きかったのは確かです。今までの生活に悔いがなかった訳ではありませんが、楽しかったと思えることは本当にたくさんありました。

昭和63年北九州市にある産業医科大学を卒業後、川島康生教授の大阪大学第一外科に入局したのは、その当時心臓移植の再開が待ち望まれていた頃で、医学生にとって非常に魅力ある診療科でした。ただ、移植そのものに強い関心があったわけではなかったと思います。しかしその後進んだ大学院での研究は心臓移植後の慢性拒絶反応に関する研究で、ラットの心臓移植と免疫実験の毎日の中で、外科医を目指す者として手術に携われないことに焦りを感じることもありました。

平成8年に大学院を修了して、カリフォルニア州のロマリダ大学で心臓移植の研究を発展させる機会に恵まれました。ただ、留学資金が足りず断念しかけた時もありましたが、幸運にも財団の奨学金を頂くことができ、綱渡りの留学生活でしたが非常に楽しい3年間を過ごすことができました。この当時日本では多くの施設で心臓外科医を目指す若手医師は、十分な執刀経験を得ることができなかったため、留学中になんとかアメリカの医師免許(ECFMG)を取得し臨床経験のチャンスを得ることを考えました。しかしビザの問題で引き続きアメリカで臨床研修に移行することはできず、2年間日本に帰らなければならなくなりました。2年後の平成13年7月、オハイオ州のクリーブランドクリニックでクリニカルフェローとして採用され、今回は資金の心配もなく2年半アメリカの心臓外科の実情を目の当たりにしました。「手術数の多い施設は成績が良い」と言われたのはその頃で、当時10人の外科医で年間約4000例の心臓手術を行っていました。ただここでは、レジデント、フェローに手術をさせることはあまりありません。私は幸運?にも、ロマリダ大学留学中から開発に携わったロボット手術の経験を買われ、関連病院でのロボット手術の治療研究を手伝うことで、1年半この関連病院で心臓手術をさせてもらうことができました。私にとって非常に大きな経験となりました。アメリカで外科医になることも考えましたが、いくつかの問題があり程なく帰国することとなりました。

帰国後の平成16年から呉医療センターの心臓血管外科に赴任しました。自分で責任を持つての手術は初めてでしたが、そういった甘えも許されるはずがなく、その後のりんくう総合医療センターでの勤務を含め5年余りが過ぎました。平成21年10月からは愛媛大学に赴任。成人心臓外科手術を担当し、後の教授選考に候補するチャンスを与えて頂きました。今ようやく大学の仕事というものがわかりだして、これから成すべきことや目標といったものが薄っすらと見えてきました。

これから

教授になることが目的ではなく、自分に何ができるかが重要であり、そこに目標なり目的があると考えていました。ただ私がやりたいと考えていることの多くは、教授であることが必要だということも思っていました。医療を変えたいと言うと大袈裟ですが、小さなことでは、病院内の不合理な慣習や決まりごと一つ変える場合でも、なかなか変えられないのが現状ですから、こういったことに力になれると思います。特に、修練医師や看護師の目線で問題を共有し解決に向けての力になりたいと思います。個の力を全体の力に変える橋渡しの仕事をイメージしています。このように病院のシステムや医療をより良くしていくことが、重要な職務の一つであると考えます。

大学の大きな使命として、臨床、研究、教育がありますが、これらは診療科や講座の維持、成長につながる最も根本的で重要な役割であることに違いありません。しかし私は教授の役割としてはこれら以外にも、全体を見渡して先に述べた小さなことから、地域の医療施設の連携、外科医を取り巻く問題、医療界や国における問題まで、システムや組織がより良い方向に向くように、常に問題意識を持って解決に向けて努力する姿勢が必要であると考えます。一方で大学本来の3本柱の使命の臨床、研究、教育については、教室の世界的な飛躍を夢見ています。何も実績がない私が大きなことを言って申し訳ありません。

振り返ってみると医師になってからの20余年はあっという間でしたが、その間結婚し、2人の子供も遅く育ち、妻は文句を言いながらも2度の海外留学を含め8回の引っ越しに付き合ってくれて感謝しています(今は人生初の単身赴任ですが)。自分の歩む道は自分ですべて決められるわけではありませんが、偶然の結果だけでもありません。幸運は偶然ではなく、準備をしている人に与えられるとよく言います。今回愛媛大学で仕事をさせて頂く機会も偶然の結果ではないと思いますし、この機会が与えられたことにただ感謝する次第です。

恐縮でございますが、この機会が私にも愛媛大学医学部同窓会の皆様にも幸運となりますように微力ながら精進させて頂きたいと思っております。宜しくお願ひ申し上げます。

医学祭を終えて

第35回愛媛大学医学祭実行委員長 宇都宮 大地

今年は5月21日、22日に医学祭が開催されました。今年は3月11日に東日本大震災に見舞われ、医学祭の開催を自粛した方がいいのではないかとの声も聞かれましたが、教授方をはじめ多くの方々の後押しもあり、愛媛大学医学部から日本を盛り上げていければと思い、開催にこぎつける事ができました。今年で35回目となった医学祭ですが、先輩方の作ってきたものに負けないように、自分たちなりに最高の医学祭にしたいという思いのもと、実行委員会一同準備に取り組んできました。こうして第35回医学祭を無事終えることができたのも、在校生、OB・OGの方々、大学の先生方、そして地域住民の方々のおかげだと思っております。

私たちは第35回医学祭のテーマを「VOICE」とさせていただきます。このテーマには「私たち一人一人にできることは限られていますが、みんなの声を一つにすることで、日常生活の場においても、医療の現場においても、助け合い支えあって大きなことを成し遂げていきたい」という思いが込められています。今日本が大変な中、本医学祭が、みんなの「声」を一つにして助け合うきっかけになればと思い、第35回医学祭を作り上げてきました。講演会では自民党議員の三原じゅん子先生をお招きし、「女性の健康と福祉」をテーマにご講演いただきました。また、愛媛大学放射線科教授の望月輝一教授には、いま福島原発で話題となっている「ヒトと放射線」についてご講演いただきました。現役医学部生の黒木聡三さんによる脳科学についての講演もあり、様々な性別、年代、職種の方々に興味を持ってもらえるような講演会になったのではないかと思います。また、今年も去年に引き続き、栄養企画、看護科1日体験、キャンパスツアー、救急車展示などの企画を行い、去年同様大盛況でした。

どの企画においても、私たち実行委員の力だけでは到底成し得ることはできませんでした。地域の方々や諸先生方をはじめ、多くの方々のご理解とご協力のおかげで、第35回医学祭は成功を収めることができたと思っております。

今年は天候に恵まれ、すべての日程を無事終えることができました。後夜祭のあと、たくさんの学生が「今年の医学祭は本当に良かった。ありがとう」、「本当にお疲れ様」などの声をかけてくれました。実行委員としてはこの上ない喜びです。この経験を後輩たちに引き継ぎ、来年以降、今年以上の医学祭を作ってもらいたいと思います。

これまでご協力して下さった皆様方、本当にありがとうございました。実行委員一同心より感謝申し上げます。



スタンフォード医療研修に参加して

■ 須藤 萌 (5年生)

(前列右端)

スタンフォード医療研修には以前から興味があり、今回思い切って参加することを決意しました。

2週間のプログラムでしたが、新鮮で充実した内容でした。この研修では、スタンフォードやUCSFの大学病院、free clinic、子どものためのホスピスなどの様々なアメリカの医療機関を訪問するというとても貴重な経験が出来ました。何より、アメリカの医療を間近で見ることで、日本の医療をまた別の視点から見る事が出来たのは研修での大きな成果でした。

また、日本の他大学やスタンフォード、UCSFの学生と知り合い、意見を交換し合えたことは本当に良い刺激となりました。

5回生となりポリクリが始まりますが、今回の経験を生かして、より有意義なものにしたいと思います。

最期にこの研修を支援して下さいました全ての方々に厚く御礼申し上げます。



■ 西 悠介 (5年生)

(右側)

今回3月17日から31日までの2週間、Exploring Health Care(EHC) programという形で、アメリカのスタンフォードとサンフランシスコに行ってきました。

私がなぜこの研修に参加したのかというと、この研修で日本ではなかなか見れないことに触れ、日本に戻ってきてからの勉強や実習等に活かしていきたいと思ったからです。

この2週間で振り返ってみると、あっという間の2週間でしたが、密度の濃い充実した毎日でした。大学病院や、free clinic、ホスピスなど様々な所を訪れましたが、どこも興味深いところばかりでした。私の中で、特に印象に残ったのは、free clinicです。free clinicとは、金銭的に貧しい人たちが、無料で医療を受けることのできる病院ですが、主に学生などの手によって運営されています。そこで患者さんに聞いたのは「日本の国民皆保険制度は本当に素晴らしいね」ということでした。アメリカは医療格差が大きいと言われていますが、それを肌で感じる事ができました。

他にもここに書ききれないたくさんの方々のことを経験する事ができました。愛媛に帰って、この研修で感じたことをもとに勉強していきたいと思います。

最後にはなりましたが、この研修を支えて下さったたくさんの方々に深く感謝申し上げます。



■ 新堂 赳大 (4年生)

(前列)

日本列島が未曾有の大震災を経験してから数日後、私は日本を立ち、2週間をアメリカで過ごしました。当時、アメリカでも日本の震災については報道ニュース番組の第1番目として報道され、世界的に注目されていることがわかりました。そして、アメリカの町を歩いて知り合った人の誰しもが私が日本人であることを告げると、震災の被害を心配してくれ、人情味に溢れていたことに驚かされました。

スタンフォード研修の2週間という期間に詰め込まれたプログラムはそのどれもが濃厚で、1日1日が経過していく速度がとても早く感じました。研修を修了して私が強く印象に残っていることは3点あります。

1つ目はStanford University、UCSF (University of California, San Francisco) の学生で知り合った誰しもが優秀であり、物事に対する積極性と意欲に溢れているということ。

2つ目は日本の学生でありながらも日本だけでなく他国へと視点を巡らせ、自身の成長の糧とするべくスタンフォード研修に励む他大学参加者と交流を深められたこと。

3つ目は現地の英語を聞き取り、話すことの難しさ。大学に入学した当初から参加することに憧れていたプログラムだったため、多くの時間を割いて勉強をして臨んだつもりでした。しかし実際に自ら現場に行き、米国医療システム、医学教育システムなどについてDoctorやMedical Studentの生の声を聞いてみると、私が読んだ本に書かれていた内容だけでなく、それぞれのシステム自体が内包する利点と欠点の両方が様々あり、そういった面を考慮に入れた上で現行のシステムについて個人の意見を話してくれたときには思わず“You have good opinions! I didn't think about it”と発言してしまうぐらい感嘆し、新しい発見に胸が躍りました。

また、今回の研修について特筆すべきことは、ただ勉強!研修!だけを要求するプログラムではなく、NBA観戦や観光などが行動計画に含まれ、人種を問わず様々の人々と英語を用いて交流を持ち、日米学生同士で絆を深め、団円で行動しつつもそれぞれの楽しさを共有できる、若い人間だからこそ必要な人間性も育むことのできるプログラムであると感じました。私にとって、多くの経験を重ねられたスタンフォード研修は今後二度と忘れられない大切な思い出として記憶に残り続けると思います。

このような貴重な機会を与您えて下さった全ての方々に感謝を申し上げ、報告を終わらせていただきます。



昨年からの企画となったホームカミングデー(愛媛大学全学部合同)が、平成23年11月12日(土)午後学生祭に併せて開催されます。講演会や懇親会などの詳細は、愛媛大学のホームページに掲載されますので、是非ご覧下さい。

3期生同期会報告

今や卒後29年経ち、「五十而知天命」の年齢になり3期生の同窓会(学年会)を平成22年11月27日(土)午後7時から松山ワシントンホテルプラザにて行いました。29人の参加があり、大阪や広島からも数名が駆けつけてくれ、盛大に行いました。近況報告については50歳半ばになり、やはり健康の話題や子供の話題も多かったのが印象的でした。チェーンソーで木を切る趣味の者、数回結婚・離婚を経験した(強?)者、独自の健康法を実践している者など、ユニークな全員の近況報告を聞きながら楽しい夕べを過ごしました。また2次会にほとんど全員が参加いたしましたが、学生時代のノリで裸を披露する者もあらわれ、医学部の3～6回生の時の宴会を福利会館で頻回にしたときに(当時宴会費は1500円程度でした)タイムスリップしたような1夜でした。ぜひまた同期会をさらに盛大に、近いうちに行おうと約束し夜半に散会いたしました。また翌日の日曜日は希望者によるゴルフ大会が行われ、さらに楽しい日々を過ごしました。なお、多くの3期生が、ikedasou@freeml.comにて同期生間の近況報告・意見交換を行っていますので、3期生の皆さんはまたご連絡いただければ幸いです。



(文責 高田清史)

13期生同期会報告



平成22年11月6日、医師となって20年目となる年に、卒業以来初めてとなる同窓会を松山(郷土料理 五志喜)にて開催しました。大体13期入学もしくは卒業という“ゆるい”基準、かつ、いい年して居酒屋で開催というあやしい声かけにも関わらず、予想をはるかに上回る48人参加という盛大な同窓会となりました。卒業以来の再会となる者もいましたが、みんな意外に変わってないのに驚き、学生時代にタイムスリップしたようでした。基本的にメールのやりとりで出欠の確認を行ったのですが、当日は来ないはずの者が来たり、来るはずの者が

来なかったりで、いい加減な幹事もさすがに焦りました。“一応”予約しておいた2次会にも42名が参加し、合計すると5時間の大会宴となりました。

教授選に2名が出馬中ということで、今回は教授就任を祝って、もしくは残念会でとか勝手なことを言いつつ、次の再会までの解散となりました。

準備期間が短かった事と幹事の適当さから連絡できなかった方、急なことで都合つかなかった方、この場を借りて「ごめんなさい」。

(文責 曾我部一郎)

27期生同窓会報告

27期生は平成23年1月9日に道後グランドホテルにて、初めての同窓会を設けました。

総勢30名(子どもも4名)の参加者でしたが、初めての同窓会とあってか、半数は県外からの出席者が占めていました。県内の同期生は、初期研修の2年間はもちろん、その後も研究会や学内などでよく顔を合わせていましたが、特に県外の参加者は卒業後初めて顔を合わせた人も多く、現況報告は1人ずつゆっくり時間をもち、幅広い話題で盛り上がりしました。

同窓生代表の挨拶を皮切りに会は開始しましたが、前半のfree timeでは、卒後6年目という比較的若手の会ということもあって、専門医から学生(大学院生)まで、臨床医から基礎研究医まで幅広く、数々の笑い話や悩み話まで豊富に耳にすることができました。また、女性の参加も多く、ママ会と化している一面もありました。どの参加者も、学生時代とはいい意味で変わったようで、でも根本は変わらないところに、どこか安心を覚えました。学生時代を思わせる、温かい会となりました。

今後5年毎には同窓会を設けようと宣言して会を終了しました。次回はさらに人数が増えることを期待しています。これを讀まれた27期同窓生(入学同時、卒業同時等、少し幅広く同窓生を語っています)の方、是非次回ご参加ください。できる限り早めに連絡を回したいと思います。

(文責 桑原こずえ)



第7回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会報告



平成22年7月31日(土)夕刻より、第7回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会が、例年通り、福岡市の博多都ホテルにて開催されました。出席人数は18名で例年よりやや少なかったのですが、総会に続き、特別講演は、7期生の長崎県立大学国際文化経済研究所教授の立石憲彦氏にお願いして、「離島の医療の現状」を御講演頂きました。医療財源の乏しい中、不足点をあげつらうのは簡単ですが、医療サービスの供給側も受給側も、財源不足の共通認識下、協力関係の構築及び効率化を展開し、それなりの実績や効果を上げられている現状報告は、ある種の感動を呼びました。その後の懇親会は、少ない女性陣が各テーブルに配され(住井事務局長の粋な配慮か?と思われませんが…)、それぞれのテーブル間を往来しながら歓談し盛り上がりました。続いての同ホテルでの二次会、中洲に場所を変えての三次会も例年通り、いやそれ以上に盛り上がり(喧嘩寸前の盛り上がりも一部認められたようですが…)、来年も又来るぞとの思いを強くした支部会員の面々でした。平成23年は九州新幹線全線開通の年であり、関西方面との繋がりもより緊密になって来ますので、同年の第8回九州支部総会への中四国並びに関西の同窓会員様の飛び入り参加を期待しているところです。

(文責 九州支部長 西口昭弘)

近畿支部2010年度総会報告

近畿支部は2000年7月に同窓会初めての支部として設立されましたが、その後活動が停滞してしまいました。申し訳ありませんでした。

昨年10月頃から、また名簿整備から始めまして今年4月17日、大阪のホテルグランビアにて10年ぶりに再出発の総会の開催にこぎつけました。

現在、近畿支部管内には約400名の卒業生が活躍しており、今回の総会には52名の参加がありました。



冒頭、震災犠牲者、同窓会物故者に対して全員で黙祷をささげた後、後藤精司代表(S54卒)のあいさつで開会、続いてこの空白の10年間の経過報告を行い規約を改正、総会を3年毎から毎年開催といたしました。活動の停滞を反省してのことです。

総会に引き続き、「パンデミック2009のまとめと課題」という演題で、大阪府立公衆衛生研究所副所長の高橋和郎先生(S55卒)に記念講演をしていただき、活発な討議が行われました。新型インフルエンザの動向、今後の見通しなど、最新の知見が得られ、実地医家にとっても非常に有益な講演となりました。

講演会の後、懇親会が持たれ高橋先生のご発声での乾杯の後は、それぞれ同期の者同士、あるいはクラブの先輩後輩といったグループでひさしぶりの再会に話を花を咲かせました。また、あちらこちらで名刺交換の風景も見られ、今後当支部が仕事上も役に立っていくことを願っております。

今回、近畿支部の存在を全く知らなかった同窓生も多く、この10年間の空白を痛感した次第です。今後しっかりと埋めていきたいと考えています。

近畿支部は近畿圏(近畿2府4県、およびその周辺地域)に居住、あるいは在職の方で構成されています。今回連絡のなかった方、また他地域の方でも参加ご希望の方(!)、是非ご連絡くださいますようお願いいたします。

来年の総会は2月ごろに予定しております。

(文責 朴 信正 park@h9.dion.ne.jp)

第5回愛媛大学医学部同窓会中国支部総会報告



平成23年5月21日、岡山駅に隣接する「ラヴィール岡山」で第5回中国支部総会が開催されました。参加者は1期生から18期生まで総勢32名。支部代表下原康彰先生（1期生）の挨拶で始まり、川崎医科大学消化器外科准教授の山下和城先生（8期生）が「大腸がん治療の現状」と題し、記念講演を行いました。最新の内視鏡手術の進歩にも驚かされましたが、現在の愛媛大学本学、医学部、松山の街並みなど、懐かしさと同時に変貌した風景の映像に皆感慨深く見入っていました。

懇親会ではそれぞれ近況報告を行いました。学生時代や最近の身辺の話題が飛び交い楽しい時間を過ごすことができました。殊に出席者の多い学年は同期会の様相で大変盛り上がっていました。同期生のみならず先輩、後輩の先生方との交流は地域における医療ネットワーク構築に大いに役立っていると感じられました。

現在中国5県で約300名の愛媛大学医学部卒業生が活躍中です。ただ会員の移動も多く、全ての先生の所在を把握することができません。今回案内が届いていない先生はご面倒をおかけしますが当支部へご連絡いただければ幸いです。次回は2年後（平成25年）に広島で開催です。さらに多くの先生方、特に若い先生方の参加をお待ちしております。

（文責 田辺耕三）

第8回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会報告

平成23年7月23日、第8回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会が、例年通りの博多都ホテルにて18時30分より開催されました。ここ数年20人を切っていた参加人数が、今年は計21人となり久しぶりの盛況でした。昨年は小川暢也先生が体調不良で欠席され教官の参加が0だったのですが、今年は見事に復活され、お元気なお姿を拝見出来、同窓生一同大変嬉しく思いました。また、遠く宮崎から浜田稔先生も駆け付けられ教官2人となり、皆の更なる喜びとなりました。



総会後の学術講演では、大分大学医学部・大学院医学系研究科 生体構造医学講座 教授の9期生濱田文彦氏による「ハエを使って発がんのメカニズムに迫る」というショウジョウバエを使っての基礎的研究成果を興味深くお話し頂き、いかに濱田氏がショウジョウバエをお好きかが良く分かり、好きこそもの上手なれと再確認した次第です。ショウジョウバエに目を細める氏の優しさが感動を呼んだ講演でした。

その後、例年通り同ホテルにて、懇親会、二次会が行われ、あちこちで笑いや歓声が上がりと和気あいあいとした雰囲気の中、いつまでも名残惜しいと感じられるような時間が経過しました。しかし、今年は、忙しい方が多かったのか、不思議と三次会への流れはありませんでした。

九州各地の愛大医学部同窓生の皆さん、また、来年会いましょう！来年は7月28日土曜日です。九州でない地域の同窓生の飛び入りも大歓迎です。但し、会費だけは払って下さいね。それさえクリア出来れば大歓迎ですので宜しく！

（文責 九州支部長 西口昭弘）

西予市出身医師と医学生、西予市に家族・親戚がいる医師と医学生、西予市に住んだことがある医師と医学生、西予市の医療に興味がある医師と医学生を対象に交流会「敬作・お稲の会」をします。

- ◆平成24年1月8日（日）午後2時から5時まで 西予市役所大会議室
- 対象の方は案内を送りますので平成23年11月22日までにご連絡ください。
- 参加できない方もご連絡いただければ幸いです。

【連絡先】 樋口志保（11期生）
〒797-0046 愛媛県西予市宇和町上松葉191-1
TEL.0894-62-7727 hishi523@mf.pikara.ne.jp

《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・同窓会名簿の作成
- ・定期的刊行物（会報、名簿）の送付
- ・同窓会会費徴収のための業務
- ・事務連絡及び各種文書の送付
- ・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

2. 個人情報の提供

会員から情報の照会依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答はいたしかねますので、ご了承ください。

3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

《次号会報原稿募集》

★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 20名以上の参加
 2. 報告文、集合写真を提出（会報原稿）
 3. 会費未納者への納入勧誘
 4. 3年に1回

★学生海外研修留学報告・医学祭報告（学生会員）

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出（会報原稿）

《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644

入会金 1万円 終身会費4万円（合計5万円）

《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承ください。

注) 卒業生と偽り名簿の請求や他の会員の住所照会の電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答できませんので何卒ご了承ください。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分注意をお払いいただきますようお願い致します。

《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

お知らせ

第28回

愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：平成24年5月18日（金）18時～

場所：第三臨床講義室

議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

愛媛大学医学部同窓会事務局

（生体機能解析学講座 解剖学・発生学分野内）

（旧解剖学第一講座）

TEL：089-960-5231（受付10時～17時）

FAX：089-960-5233

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp

異動連絡届(FAX用)

ふりがな		卒業年	S・H	年(第	期生)
氏名 (旧姓・旧名)	()	所属			
可・不可	現住所	〒			
可・不可	現住所電話				
可・不可	勤務先名				
可・不可	勤務先住所	〒			
可・不可	勤務先電話				
可・不可	E-mail				

キリトリ線 切り取ってご利用下さい

上記に記入されない場合は、最低限事務局と連絡可能な先をご記入してください。
この連絡先は、会員名簿には記載されません。

連絡先住所	〒		
電話		FAX	
E-mail			
通信欄			
*ご本人以外や名簿上不明者の住所をお知らせ頂いた場合の送付者名:			

送付先：愛媛大学医学部同窓会
FAX：089-960-5233